北前船。

海の男のロマンが残してくれたもの。

写真・文　タカヤナギ ユタカ

北前船が通った日本海を望む。（加賀市橋立の加佐の岬）

「ベザイ船」と呼ばれた北前船の写真（北前船の里資料館）

石川県加賀市の橋立、塩屋、瀬越は、藩政時代に大聖寺藩の年貢米輸出港として繁栄し、有力な船主たちを輩出した。従来、加賀藩の年貢米は陸路で運び敦賀や大津で売却していた。しかしそれを大阪まで送ることができれば、より高く売れ、藩の増収を計ることができる。そのためには海上輸送が絶対必要だった。千石（約150トン）の荷物を馬に乗せて運ぶと1250頭の馬と625名の人間が必要だが、千石船であれば10人ほどの人間で可能となる。それを最初に行ったのが加賀藩三代藩主、利常だと言われている。その利常の三男、利治が大聖寺藩の藩祖であるが、大聖寺藩は小藩とは言え、加賀百万石の分家としての格式にこだわり、藩の財政は当初から困難を極めていた。利治が財政安定のため、山中の奥山まで金、銀の鉱脈を探索させ、それが九谷焼の誕生にもつながるのだが、北前船の船主たちは多額の献金を藩に行い、江戸末期には大聖寺藩は北前船でもっていたと言っても過言ではないかもしれない。

とにかくその財力は桁外れで、一航海で千両（今の金額で2、3億ほどらしい）の利益をあげ、明治の時代に橋立は「日本一の富豪村」として中央の雑誌にも取り上げられたほどである。

航海の安全を祈願して馬のかわりに船の絵を描いて神社に奉納した「船絵馬」。和絵の具ではなくウルトラマリンで描かれた海や空の濃い群青色が印象的（北前船の里資料館）

博文館が明治に発行したの雑誌『生活』に掲載された、「日本一の富豪村」の記事（北前船の里資料館）

北前船の里資料館となっている酒谷家の中庭